16

寛永諸家譜

清和源氏乙五冊之内

義家流之内足利流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (16)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

最上

一色　冊

丈五

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義家流

足利流

六代上

乙こ

蔵書之印

義兼

足利上総介鑁阿寺と号さて

方の長九尺二寸

正治元年二月八日卒　四十六歳

義氏
右馬頭

泰氏
宮内右輔

家氏
新波尾張守

頼氏

宗家
又太郎

宗氏
又三郎

宮内少輔

弓氏祖

弓経
尾張守

俊理大夫　子孫武衛と号

家兼

伊与守

直持

陸奥探題

左京大夫

詮持

左京大夫

應永七年九月廿四日大越ニおゐて

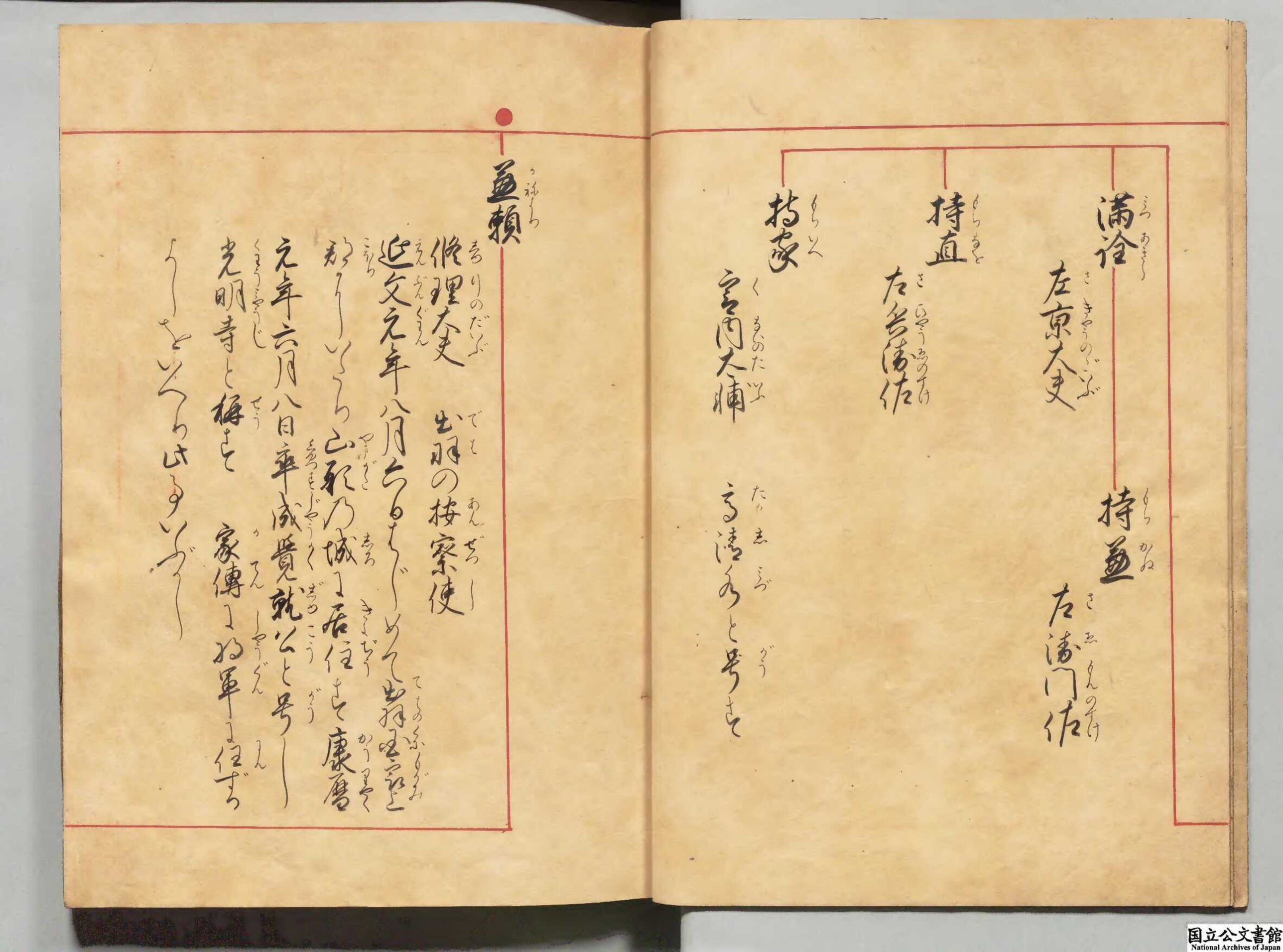
死去

満持

左京大夫

直勝

兵部少輔



満冷　左京大夫

持直　左兵衛佐

持茂　宮内大輔

持直　左衛門佐

為頼　俗理大夫　出羽の按察使

延文元年八月ニ死乃城ニ居住して康暦

元年六月八日卒成覚就公と号し

光明寺と梅寺　家傳ニ為軍ニ住ず

持義
伊豫守
法雲と号す

持頼
式部太輔
西意と号す

直家
右京太夫

應永十七年正月廿九日
月潭光公と
号し金剛寺と稱す

滿直
後理大夫
應永二十一年八月二日死
念便觀公
と号し法祥寺と稱す

頼亜

右京大夫　天童と号さて

桃林源公と号し　保國寺と梅さて

頼孫

中務少輔　天童と号さて

頼泰

天童と号さて

満長

上山と号さて

頼高

東根と号さて

頼種

号巣と号す

氏重

應永二十六年六月二十八日死　墨川と号す

義重

号桷と号す

為重

盤澤と号す

為義

彩山と号す

満家

修理大夫

嘉吉二年四月二十九日死　鹿山威公と

号一孫舎寺と称す

満基
中野と号す
天慈院と称す　金剛院

満頼
右馬允　大窪と号す

満国
伊豫守　楯岡と号す

義基

頼宗
右京大夫
文明六年二月二十一日死　天恵源公と号
龍門寺と称す

義秋
治理大夫
文明十二年十二月二十六日死　松岩芳公
号　蒲江院と称す

満氏

治部大輔　国盛寺と号す

義淳

右馬佐　天満宮と号し　龍門寺と称す

義宣

惟義勝と号し　雲照寺と称す

義守

天正十八年六月十七日死　年七十

菩提寺と号し　後龍門寺と称す

義光

出羽守　少将

義光の子

東照大権現こゝにて大の原毛の馬長十寸
五分ありと織田信長よりおくられ
給ふ

大権現の御下知にてひらけたる
又寺の御原毛の名馬
大権現へ奉りたまふ
是て御厩のきはに常ふ
此馬ゆへ武田信玄
後馬を献じ給ふ毎度御書と

たまはりあまた所拝領ありし秀吉のときも
義光

大権現をたのみ給ふ
通じ給ふ
大権現義光をあいまひたまふ御志ふ
きゆへ秀吉も如
そ法華経の
大権現の御書数通これあり秀吉も来
京をたまはる

天正十八年秀吉小笠原氏と征伐乃時
義光も
大指現の御書をたまわりて秀吉に属さ
同十九年正月八日伯父に任さ
同年奥羽南部九郎一揆蜂起乃
ときも秀吉奥羽に義向の時
大指現軍奉行に引ゆく伊達政宗の
大森城御陣とりこもる時義光ご二男
家親十三歳なりしを御小姓と
て参りてまつる節しで大石の子と御設
ゆえ召しこまれけるめし来りて御
感のあづかる
当時長谷堂より秋田京勝奥羽に
とき
大指現伏見より江戸に下りたまい義
光及ばれ隠士に任じて京勝と号
しすぐして御帰国と出羽會津へ
御愛印に給りの時義光御書

とたまりこを刻まし
為度中いの今津表出津ら後来れ
一日おろしに其表ら流れ国ん一ちまち
来体に強ん方のめりに水国表ら
水田しくく流れと和ら津へ一ちて入に
稲津金浦程亮中この市ん津つ一市ト
ちて

ちりちる　秋庚申市
出羽侍従屋

石田治部少輔三成と方して係反の
ときに関東へ其きしあらきし義光
同じこの郷士のこころあるものを
家して拾ちとたてしむ時
大指現ちわ志ごく清書とたまりてと
方の乱とぶたまふ乱よいく
為度中入に治部少輔郷アの輔に光
ちく〳〵弱状と回付ら雑説中人条乱働
後先深ら方人浪世事ら

扇子一本入大坂ゟ飛脚佐兵衛
堺中付ゟ一所ゟ堺ゟ
手代ゟ指ゟ

七月廿三日　安康御判

市野伝兵衛

堺中入人のゟ京一回ゟ
ゟ許摘ゟ記中末代ゟ
ゟ法人併中綱ゟ指置ゟ
表御ゟ飛脚ゟ指

時ゟ

七月廿九日　安康御判

市野伝兵衛

堺中入人のゟ許ゟ扇子
所ゟ存ゟ中人飛ゟ書
ゟ今ゟ法ゟ法表行ゟ
扇ゟ中納ゟ飛ゟ飛脚ゟ
一本ゟ

八月二日　安康御判

御朱印法度

条々

一諸国中入人幷牢人等之事

一諸国中弟兄一人も召置

一相切申法度事

一我子ども御附申人

法度事

一細川藤孝一筆之旨

右之条々堅令

八月廿七日　家康御判

御朱印法度

条々

一諸国中入人幷牢人等之事

一諸国中入人一人も召置

一相切申法度事

一我子ども御附申人

法度事

一細川藤孝一筆之旨

右之条々堅令

八月廿七日　家康御判

本庄伯耆殿

同九月十三日十月朔日より十月まで
義光と京勢と数度の
うちたがひに猛勇あり之を述べ京勢へ
注進

大檜現へ中之神へ
一長谷堂にて九月十五日同廿四日同廿
九日三度合戦と京方水野勇弾
後中息杉下本工助三人と百余人

討死事

一 上山にて九月十七日稲村道酒田平田
石見と始三百余人討死
一 十月朔日長谷堂より軍陣を村上井
境を押寄千余人討死
一 白岩を二の江右沢上侍屋敷一所にて
千五百人計討死
一 庄内大浦に体攻落城を杉下父子
と始三百余人討死事

一仙道柳田城攻落城主父子と始男
女共ニ又百余人打死ス
一政宗より九月十八日為加勢鉄炮
百貳拾丁越やり事
一同廿二日馬ニ百又十疋足軽千余人
越ル

此
山口数度の合戦ニ義光ゑ人畑谷の
城主江口又兵衛同小吉同甥右仁飯田
の城主播磨ひがしら加藤清正
新宮伽羅鉄炮ばらし岩瀬和泉法
ゑ番草刑部吉人林修屋助吉清吉
中山ゆ吉右衛門城主鉄砲大角内記
同長九郎新貝又右衛小野田七八原
荒右衛門日野八郎畑屋清右衛細谷
荒太郎堀越義人小ゑ討死
大指現すでゑ長の逆乱を志げめ
ひ大坂の城ゑ向寺内京殿も

又義光が地をあらそふ時
大樹現ぜられ御書をもつてこまかに
無度申さるる大坂相模守に
御和申付る系図
のきけんご
ゑぶ国しる並ひ所要は委細の義
将監一存いたす
十月十七日　家康御判
おほ羽侍従殿
其后敵西軍の末まで
京勝成敗一存仕得共
事ゑぶ仕無ふ詠丈夫申付ゑふ
安ふ之様ふ
十月廿四日　家康御判
おほ羽侍従殿
山合義して義光軍功あるゆへ
を為領ぜ
同六年京勝ち敵発あつて而紙をあ
ため人たまふ時
実後ゑ

見を尋ねよとて
大權現より清水寺と義光よりくだされ
を初まいらせ
一番　南部信濃守　五千人
二番　戸沢右馬頭　二千二百人
木豊源七郎　四百人
六郎兵庫以　三百人
三番　秋田蔵右衛門　二千六百五十人
赤尾津孫次郎　二百五人
四番　仁賀保兵庫以　百八十五人
滝澤刑部　百十人
岡越孫三郎　六十人
岩屋右兵衛尉　四十人
宮上源理大夫　六十五人
右之同出羽守　五百五人
五番　越後伯道　六千人
村上周防守　千八百人

薄口伯耆守　千二百人

都合二万六千六百五十人

寛永六年八月廿四日市来市

同十七年三月廿五日相模守任ぜ

られ義光公に対し奉り病身にて

ゆるゆるあるべきなり

大猷院様に対し奉りたるもつんだめ同十七年

後府にて御しきりに成り

正純と使として江戸へ参らるる

義光といざたひて城をたてる時分のもの

と市立国まで引き寄せ市の如く

相候ものとすれば市あるべ市

なづけ市業と申候

呉服市商人傾いて市前とまかり出

別こまとして江戸へ参る

江戸へ参りて

石滝院殿と申し奉る時同じく参る

とゆるされ有て相国へ参る

義光病中之

右遠院殿より御書をたまはる

為書付蝋燭二百挺銚子五十枚并

黒くし馬一さし家入之所親興合

将又和芳之中ゟ生肝要之由

佐渡守へ申遣

六月十三日御判

立之分

和芳御乳ゟ駿河守

[illegible]戸ゟ来年来ル仮義之

ケ一免除之旨被仰付

佐渡守へ申遣

十二月十七日御書下

[illegible]生れ申すべく

同十九年正月廿八日年玉 六十九歳

玉山白公ゟ光源院へ

義康

俊理大夫

義光と不和にして殺さる

家親

後河内守

文禄二年正月十四日はじめて

大檀現に謁せしに時に御違の家

の字を賜ひ後に江戸に来りて

慶長元年京に上りて十八歳

同八年京孫謀反の故家親

石清院殿の供をして家康に従ひ

そこなわ位引き出でしかば伯父

を殺し

同十年四月八日伯父に使ひ

同十六年琉球国に来朝して御礼の

とき御親養老乃役を勤しこの擬家
京洛第一面の時を以て相続を
同十九年大坂陣のとき親父釈八郎
洛第一番あつべきのもの
右流厳御書をたまはる
今度第一番に仕て手柄
大京亮米津勘兵衛田盛
今度諸手入之事仕事
御書下

第廿九年十月世を
家親病中に御書をたまはる
元和二年三月五日 二十六歳にて卒
安京長公と号し 盛光院と称す

義俊
源次郎

元和二年ゟ親年寄して仕家督をゆづ
福島左衛門大夫御改易の時り 仕ふ
まつらがたりあり ハこまと云つむ面
きのもの義後仕さとかうあ
同八年義後家人松浦伯耆のべ
右衛門 宗親が弟 継也越あと 術論のす
ありて江戸さまさまの論まバ 上関ゟ
也 義後が家臣とおもしろすあと
さふ罷ゟ而領とあけし引

三万のうちゟて一万石をまゝ
寛永八年十一月廿二日死と 二十ゟ年
華嶽英心と号し 月照院と称と

義智

仙洲 生国武蔵
義後死ゟ一万石のうち六千石を
ゟく許領と
寛永十三年八月十日

将軍家御同見

義長

千秀　生國同前

家紋桐葉

旗紋白地黒二引両

一色

義家公代

義氏

足利右馬頭

泰氏

宮内少輔

国立公文書館
National Archives of Japan

公深

大史法師　宮内卿　一色の元祖

範氏

次郎

範光

修理大史　慈雲寺と号さて

詮範

左京大史　長慶寺と号さて

寛慶院義詮より諱の字をたまはり

明徳二年山名陸奥守氏清叛逆を時

詮範花院義満公の義とう為に

堺引田聖ゝ合戦をいたし詮範

おなじく氏清ひき猶子小二郎とうち

ゝ所ここの義功よりて若狭国今宮庄

をたまはる

満範

修理大夫　右馬頭　慈光寺と号す

廉范院義満公より諱の字をたまはる

持範

次郎　式部少輔

勝定院義持公より諱の字を賜る

政照

七郎

長禄四年　治部少輔に任ず

寛仁二年　特じて式部少輔に任ず

慈照院義政公より諱の字をたまはる

須地をもつて沙汰の御書又

御問書いまこゝあり其後義政公

出仕をとゞまり奉書これあり

政具

七郎　法名宗邑

長享二年兵部少輔ニ任ジテ

明應十年侍従ニシテ式部少輔ニ任ジテ

慈照院義政公ノ御諱ノ字ヲ賜ル領地

ヲ当家ノ御所書ニ今ヨリ書キ加ヘラル

法住院義澄公ヲ領地ヲ当家ノ御書

ニ書キ加ヘラル

晴具

七郎

天文二年正月二日従五位下ニ叙シ

式部少輔ニ任ジテ

万松院義晴公ノ諱ノ字ヲ賜ハル

光源院義輝公ヲ領地ヲ賜ハル

其ノ内又義澄公ヲ領地ヲ賜ハル奉書

ニ書キ加ヘラル

文これあり
同十八年死去
玉雲院と号す

藤長

七郎
天文六年式部少輔に任ず
剃髪して一遊斎と号す
光源院義輝公より諱の字を給わる御書これあり
諱は義藤なり

同十二年義輝公領地を没落後
増とだまふ四度の奉書これあり
雲陽院義昭公より御書数通をたまわる
今これ所持せず
織田信長豊臣秀吉書札をたまふ
東照大権現御書をたまはいまふ見る
所持せず
文禄元年四月九日死去
幽雲院と号す

秀勝

紀伊守　法名入斎　一雲院と号す

宗傳

字ハ以心　南禅寺の長老

大權現

右法院殿

将軍家の御師匠と侍り　鈞命なり

けり法名は僧録司なり

右徳院殿乃御執奏をもて国師号を賜ふ

寛永十年正月二十日寂す　年六十六

範勝

七郎　左兵衛尉　後中務少輔　式部少輔

慶長十六年　駿府に参る

大權現と称し奉る

元和二年
大猷殿太政大臣に任じたまふ時勅使後府
に下向し御儀あり時に范勝を位を
官に叙し給へば御配膳をつとめ
きの名命をかうむる時永井
右近大夫直勝言上して范勝を位
を官に叙せらるる仍て法大夫乃列ふ
大猷殿きこしめされて御感ありて一色の家

其名くきたかし官位をくしてこの役を
つとめしかるべし親族たるべんぞ
くらかんやこしかるべしとて范勝馬帽子
系袍を着しこまをつとめし
寛永六年酒井讃岐守忠勝
将軍家の御命をうけ参内し御恩厚の
む祝ことに法大夫に任ずべきものとこ
の少へ同十二月位を位下に叙し
式部少輔に任ず

同十年六月十九日病死ス行年八十三歳
法名天岸宗清

範次
右馬助　生國武州
元和八年十四歳の時
将軍家ニ拝謁

範尚

女子
右近　生國同所

兼
長七郎　生國同前

家紋　桐葉
初八二引ゑ　慈照院義政の時より桐葉用

国立公文書館
National Archives of Japan

一色

直明

宮内右輔　従四位下

直明ハ将軍義量のまこと

義嗣の子なり一色左京大夫養子となり

今案ずるに此説たしかなり義量ハ将

軍義教の家督となりて世を

国立公文書館
National Archives of Japan

子たる義嗣公義量の叔父なり私に愛憎不
審多端なりて亜明の前代に皆亡れ
とのごく

直清

亜頼

直朝

宮内大輔
清和院別当

没不伝

義直

宮内大輔
大指現へあり出さし侍奉公

照直

次郎

直為

忠次郎

亟氏

宮内大輔

家ゝ紋　桐

国立公文書館
National Archives of Japan

一之

某

主殿　生國三列

某

主殿　生國同前　江列之位

外郭儀俄兵庫　養子ともち

真重

孫次郎　生國近江

剃髪して樂運と号さ

真重ハ系して又ハ勢列ニ居

もてなしかしめ　おさし

東照大權現ハ江戸ニ来地となる

釣命をかうむり三列ニ加わる

諸事万術ハ法と甚ハ又来地の法

重政

次郎兵衛尉　生國三列

母ハ一色右馬之助女　弟万之妻ハ久松佐渡守

かうぶりを賜ハる

天正十八年関東江入國の時真重やま

ひ病ニて伏せ

同十九年二月十九日三列ニ居ながら死

法名喜巻雲公

が女松平因幡守松平隠岐守が別膳奉
行たち
重政を来して又ふたゝび又母のこと
りあるよりて関東よりして事
をえずいろ〳〵二引ゝ居さとなる
大指現淳と沙乃時重政七歳にして二引
出淳の淳兼ねて成瀬伊賀守
とともつぎとして
大指現と称し来てもつて淳恩厚の

作をかゝるもとゝ重政幼年なる
少へ幕下ゝ入はゝへゝ
母のこゝろゝまつゝずて
りへあづまを松平隠岐守に勝が
とゝ〳〵麿下ゝ屬ゝ
ゝ住ゝ二十一年
寛永十六年十月
将軍ゝ称ゝ
同十七年の冬淳扶持方をたまゝ

政成（まさなり）

長次郎　生國勢州（せいこくせいしう）

家紋（かもん）　桐葉（きりのは）

国立公文書館
National Archives of Japan

冊胤

清和天皇十三代恭氏七男

●云源

一色大夫法師

範氏

次郎

直氏
右京亮

氏兼
右京亮

氏宗
勘次郎

氏明
丹波平三郎　尾州丹波郡之住

氏時
次郎左衛門

氏盛
傳助

国立公文書館
National Archives of Japan

氏範

勘六左衛門

氏信

和泉守　尾引打戸の株ときづいてこれ

氏負

彩助　尾引なかの株ときづいてこれ

住ま

氏興

平左衛門　居株同あ

氏清

若狭守　尾引岩時の株ときづいて

住ま

永禄二年十一月二十一日死去　七十八歳
法名孫蔵道夢

氏識

右近大夫　居城同前
尾刑部少輔の惣主冊脇右ゑ門尉
岩淵の一族ゟ以ゟ別ゟ一変と
立くゟ引いまに淵ゟ家
氏識淵の惣ゟ右ゑ門と

せめはるかさんゟ時右ゑ門尉の
名と信長ゟこひけ申すゟ信長
加勢ゟてこれ
ゟ時ゟ父氏清と岩淵の惣ゟ
重ゟ息氏勝と先ゟ信長
ゟ我て其先陣とあゟ時ゟ信長と
おさめて引ゟ氏識父子勝ゟ家
ゟと進平治ゟ敵あゟ
ゟ其後ゟ元又加勢と信長

とゝゞし信長公とゝゞきずこまゝよつて右る元為ゝ右住すれとあゝこずして三引ゝゆさ廣見の城主をたのんてゝゝく住さとうまゝわして氏識為ゝ

東照大権現信長しゝゞこさしの事ありて岩倉八尾引三尺南國の要害の地ゝゆへゝ氏識と信長しわまゝとゝゞゝし前日右る元と信長ゝとあハすれのうゝあゝ

ゆへ信長ゝ屈せさゝてまつゝ

大権現ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝてまつゝ

大權現市感ゝたゝゝ三引の内七尾

一色赤羽根二ケ所を給ハれを後

大権現と信長市和睦あゝて岩倉八元来

尾引ゝ屈せゝゆへゝ氏識も又信長ゝ屈

ゝ三引の仕地ケのごゝく知りまて

永禄八年六月十九日病死年九歳

清安道休と号さて

氏勝

右之大史　居城同前

もしめ信長に仕へ後に

大指現に為渇と

景長二年十一月二十二日死　七年系

雪庭道かと号す

氏次

勘助　居城同前

信長に仕ふ

天正十年信長桔遣の仮伝雄ふ仕へ

盟を伝雄の勘氣をかうむる故也

大指現を為てうてまつる

同十二年秀吉と伝雄不和にまして

大指現は伝雄に[illegible]

大指現氏次に命して岩城に向て二列要

言の地に城郭をかまへべきの　命をか

うちすまうから岩渕よりかしらを城とき
づくるなり
大權現小牧より陣をとり移りとうけ給
氏次小牧よりもりて
大指現より高つしまてまつる時より
大權現氏次を命して岩渕よりうちはたを
かくしべきのよし意くるをもし氏次
たうへてやけうの後じ当代の素内
しゝぐんするの百姓ぐくハ先かげをう
ゆ者ゆゑにて忠義をとりげもし感
ゆあづうたさしのごとくやけ也ハ
大權現こゝをとりたまい金光沢郎三郎
氏重より岩渕の城をまもりしめ氏次ハ
大指現の清先よりくゝ百四月九日池田
氏父子岩渕の城をせむ氏重かゆせき
たうもとゝ大敗きうい未刻へ
氏重并妻子たうい死ぬ
同日の野林原大須賀大中多まびよ氏次

小法師丸と申し長久寺に秀次の
名を細山法師丸と申し氏次先陣まゐ
ていたし敵の首あまたとりとり
同六月鎧江の城を攻しとき氏次
出丸をかこ二ケ所をとりあつ同
家臣冊羽年五郎兵衛と其外従者
あまたご戸をかこ攻
大權現の命ふたり信雄羽引
ふく七ケ石を領ず

同十八年信雄羽引秋田に配せらる氏
次氏次
大權現ふたへくてまゐらんと欲すと云ども
秀吉ふたり氏次を秀次に付弟し
少へ子息勘兵衛氏資と
大權現へ出てまゐらこと
又木田具的村二ケ所の地を氏資ふたまふ
慶長四年氏資右衛門佐と死す
同五年関ケ原陣の時氏次

大猷院様御諱ハ仕奉り
同年三月伊保ニて一万石の地を拝領
同六年二月十九日病死ス十二歳
法名大義道周

氏信

勅助　生国伊勢
寛長四年
大猷院様御諱ハ家光

大坂冬の陣御供つかまつり水野
日向守組にて天王寺口おもむく
豊臣再乱の時ハ道明寺口むかう
元和二年　浅野左近下総守殿
仕る

寛永十六年
将軍家より浅野弾正少弼殿の
御内を詳仕る
岩村の城にて二万石

氏宮

勅助　生國三河

元和元年

台德院殿

將軍家へ祥謁

家紋九本貫の檜扇

公源

一色玄円卿律師

太屋

範氏

次郎

範光

右京大夫

詮範

右馬権頭

満範

丹後守　右馬頭

義英

右京大夫　安芸守と号す

持信

兵部少輔

教親

右京大夫

義亜

右京大夫

国立公文書館
National Archives of Japan

改直
兵部少輔

範貞
兵部少輔

義能
左兵衛

範次
兵部少輔

藤直
伊賀守

藤次
金九伊賀守

国立公文書館
National Archives of Japan

武田氏よりして武田一族の氏を少弐
さし一条とあらため秋山と称ぜ侯
武田安芸の安とをいで又金九氏よりたち話
事とゆ法さ

虎副

若狭守
武田信虎よりへて出る左右ともあ
ぞこしよりて法虎より虎の字をぞ

虎義

筑前守　法名大叟存九
武田信玄よりへ軍中の使番ナニ人の
内よくつとめて蹴鞠の道をあづ
かり五体二三年の後病ひかくれて
死去さて

業

平二郎
信玄に仕へて二十一歳の時義合戦助と
事ありて死せり

昌次

平八郎　後あつためて左尾右清衛
ともさと
永禄四年信玄と長尾景虎と信州川中島

合戦の時信玄長坂源五郎昌根
孫次郎三枝京四郎加藤弥五郎昌根
与一郎高源五郎昌次等の使番となりて黒地金の百足の差物と
ゆるされ昌次十七歳にして軍功
あり
同年より同八年の間に川松山厩橋井
萩原等の合戦に昌次敵を首級を
得ること数度戦功あり武田源右

みく一日ゟ後合戦の時昌次さゝ乃ん戦
て敵を討ゝ此軍功ゟ武田
の長臣ゝなりて土屋右衛門尉と号し
伯大ゝなりて五千貫とあづかる
信玄京虎と云ひ石倉ゝて第一陣の時
山縣三郎兵衛尉ゟ先陣ゝ昌次二陣ゝ
なりて合戦ゝ敵の首あまゝ
ゝ山縣ゟ三十七級昌次ゟ四十九
級得ゝ

元亀二年三月賀茂郡合戦の時三河
の軍兵二百餘人昌次こしれと戦て
馬と敵陣へ乗こみく大ゝをいけどりく
信玄の実検ゝ入事と
東照大権現ゟ伝聞ゝ
ゝ武勇と感ぜゝ
同三年三方原合戦の時小山田ゟ兵大久保
七郎右衛門ゟ兵ゝ戦ゝて小山田ゝ
ゝ利ゝ昌次こしれと乃く後を

れて小山田とすくんと走けもどし事さる
ちと急もして後と敵事あるこはされ
少へ力とねいてもせしかい多左四郎つ
ゐたがいよたかうちするさぐらくわ
ちくく昌次四郎左清門と組ぐくとうて
四郎左清つてあわるぐ力うて昌次ぐ
甲ときちとゐへどし底ぢす昌次つふ
さいまとうちとれ
天正二年五月二十一日長篠合戦の時昌次

勝頼ゑちとかいて後白と見ちわさき
位云年去れ時昌次死ゑ走こがれんすと
こうとゐへどもこる坂弾正忠ゑくいきめた
敵ハ人ゑ今死せん事ハいと易かるべい
のちとあぐくへて勝頼のあふ戦死せんハ
かくれるちわとゐへば昌次ゑ切り
死をずして出ゑ勝頼のあふ討死せん
無こる坂ばかくいきくいとろちわとゐつ
て敵ハ柵のうちへ寄こみて昌次ひとりまも

すんでみづから柵の本を引やぶりて榜の
門へいらんとする敵洪水をもちて昌次を
をぢゆへ昌次これをあらわて
庇をかうむりたれども討死をとげ年一歳
法名道宦

京治

秋山左衛門佐
秋山伯耆守の長男にて秋山と称号
甲斐大膳大夫謀をあづかりて八年を謀

二十九歳にして病死　法名正山

昌義

金九助左衛
甲斐くづまの時昌義小原丹後同下総と
勝頼の命をとり節々甚忠ある女子
を言してこれを遺骨をとらせおさめて後
三人ともに自殺をとげ天正十年三月十
一日なり昌義年二十九
法名道助

昌恒

古屋出羽　右清つ府

永禄十一年十二月十二日信玄駿河

攻向て今川氏真と合戦の時昌恒兄

昌次と つゆくこれを討しかも今川が老臣

飯部右兵衛と云ものあり今川忠ふ

て勇士十八人のうちたち信玄の先かけ

をもとめ宇津房と合戦の時昌恒飯部

と士卒をうちとる時十三歳

其後勝頼昌恒と駿河清水の城をもち

ふせこれを攻たれる十二年

宇津房合戦の時飯部忠兵衛甲冑を

きうして武田家と数度の軍功

あり少へ武田家光れ称号をゆるされ飯部

とあらためる古屋氏ともあり忠兵衛昌恒が

幼年にして宇津房と軍功あり

少へ信玄のうこと雲子ゝと

天正三年六月長篠合戦敗軍の時昌恒

まづ初花信右衛門二人のこ勝頼を
たがふ忠志あるゆゑ天正十三年正月十三日信頼
乃命をもつて兄昌次左衛門佐前同忠義を
殺人同じくまづ関主水白井伊賀守服
義を誘ひ一所領の士五十人ばかりと
同四年勝頼を列横須賀の義白の時
小山田右衛門尉ら兵一番かけとつて昌恒を兵
ハ二番をもつて
同六年越後上杉景勝と和睦三ヶ所と合

戦乃時信頼景勝をとくんがため兵を数て
一番ハ一條右衛門大夫二番小山田兵部尉三番
昌恒たち昌恒敵陣乃うしろへはせま
もつてこまをとうちやぶる一條右衛門こ
十一の首級をとる小山田兵衛尉軍一
級昌恒二十九級をとる小山田ら得て
ごとの首義昌恒を信といへども山軍
中乃計策ハ昌恒をあつ移へ昌恒をとつ
て一番とす

同年の秋勝頼と野沼の堀をせめる時
武田安房守昌幸なんぎなるをたすけ昌恒はせ
さぐらして軍功あり其の志津高の堀
奈良流見の城中條の堀小川の堀猿京
乃堀岩横の堀所々に多くあり昌恒毎度家
功をとる者也次昌恒が無力服又市昌恒
よりまさりて数度武勇あり
同八年信玄公甲曹と着せずして家
前城をとせしの時昌恒大ようすん

武田昌幸はなはだしく昌恒が兵大ま
の扉下格をせあ入時服又市論をとらわ
て手門をひきこ又ら力一文左大夫後と
言てせあ入敵後ろなりてこしれをとぐ
いでし昌恒諸平をさしまいてうづ
かけ入をとりて一條右衛門大夫が軍勢を
いてせあ入つの堀をとりすこれをとる昌恒
いよ〳〵武勇乃名をあらはす
同九年信玄相州の新城同國足柄乃堀

をせしめ其時二日五度の合戦す昌恒勝わ
れらわ
同十年三月十一日甲州没落勝頼田野
天目山に入て自殺の時家人皆失ちて
わすかに六人のみ昌恒いとみ
戦事数度すして つゆす討死と二十七歳
法名道節

正猶

左馬亮八郎

駿州清水乃城をあづかりて此地に住すす
八年 六年三月病死
法名道照

京氏

金丸源義 仮に秋山源義とあらたむ
兄京治死ち乃仮秋山伯耆とついて金丸
を秋山とあらたむ
天正十年勝頼自殺の時甲州田野にて
うち死と十七歳

忠直

亟茲　平三郎　民部丞

母ハ恩部冊波守ノ娘

天正十年父昌恒死ノ後甲州ヨリ

ヲ駿府ニ引キ取リ養育ス

同十六年ハジメテ

東照大權現ト為シ奉リ　勅命ヲ

以テ越後ノ將忠輝卿ノ母長慶院殿

養子トシ給フ

同十七年

大權現ノ命ヲ以テ

台德院殿ト為シ奉リ千石ノ俸ヲ

ヲ賜フ

同十九年　冬ノ陣ニ乃時供奉シテ

同年初ノ夏　采地ヲ賜フ

其後下総國ノ門弟村ヲ加ヘ千石ヲ加

ヘラレ領ス　冬陣乃忠利ヲ下サレ

宝永五年上杉京勝謀叛の時伺候いたし
下野國宇都宮城主となるあ
上方へ御發向被遊候ヘ
同年従五位下に叙せらる
同七年上杉國昭蒜郡の内久留里の郷
にて二万千石をたまわる
同十七年四月九日死去　三十五歳
法名浄岡

女子

彦兵衛助大夫の妻
忠直の母なり昌恒没して後黒田作右
元次の妻となりて二男一女をうむ
長男八郎兵衛前名元徳系図別にあり
次男黒田作右衛門元直松平周防
家老となる一女は相馬大膳利胤の妻なり

利直

平八郎　民部少輔

母八森川金右衛門氏後ゞむすめ
利亜与茶の所
台徳院殿の命によりて父忠直ゞ遺跡とた
まはる二万千石を領ず
元和七年利亜十与茶にて
台徳院殿へ参勤となる
同年従四位下に叙せらる
同九年
台徳院殿御入洛乃供奉

寛永三年
台徳院殿御入洛二條乃城に行幸の時
将軍御迎として御未門の供をし
列の侍るにくらべて一日時の装束を
着せて
同九年
台徳院殿薨御の後
将軍家にはべりつかまつる
同十一年

将軍家市入浴の供奉
同十三年大坂乃陣書たつとむ
千石
数直
はじめ名八之丞
母八利直より同じ
元和二年
台徳院殿と申たてまつれ
同又
台徳院殿の命より
石川
右衛門大和守

将軍家市入浴の供奉
同八年市乗馬乃供奉仕をたつとむ
同九年　市入浴れ供奉
寛永元年市切米又百俵をたまはる
従也伝下る　叙爵
同也年　従列の内又百石地をたま
はる
同十年常陸介に市加俸を申領
新合七百石を領

国立公文書館
National Archives of Japan

同十八年　約命ふまして御書院書一
紙頂戴仕る
同年駿河の国書をつくし

文亟

安房の国八郡　高石金砂　長部の浦
安房亟小同じ
元和九年
石流殿へ仕へ給まる
寛永五年御書を列して御手水

書を仕る
同年功米五百俵を給る
同九年相模下総の内にて千石の地を
為領
同十年
将軍家へ仕へ給まりて御書院番
を仕る
同年御番を列して従五位下に叙
せらる

同十一年清入治代奉

同十六年清書院番くくりて金相

番代やくたちもし

直樹

平八郎

母ハ松平右衛門太夫正久がむすめ

家紋九曜の星又三石巴を用ゆ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan